

波に潜む

ぎよく

そわそわと足を踏み換えながら右を見る。

目の前には太い道路があり、そこを車が走り抜けていくのを目で追うように左を見る。

信号が青になるのを待てずに車の行き交う道路を機を見て走り抜けようとしている風を装い、キョロキョロと辺りを見回しながらもその実俺は車を見ているわけではなかった。

じっと目を凝らしながらもそれを感じさせないよう雑踏の中にあるものを探す。

するとふと、人混みの密度が薄い場所にひよこひよここと妙な歩き方をするものを見つけてにわかに体が緊張した。

あれは奴らだろうか。それとも単に脚の悪い人間だろうか。

奴らは少しみただけではわからないほど人間にとけ込んでいて、その上たいていの場合において社会的弱者を装うものだからそうと知らないものにいくら訴えかけてもこちらが逆に非難を浴びてしまう。

ちらりと前に立つ見ず知らずの女を見下ろし、きっとこいつもこの世界が自分の信じているものとはまったく姿を変えてしまっていることに未だ気付いていないのだろうと思う。本当は俺だってそう信じていたかった。

俺がこの世界に招かれざるものがあるということに気付いてしまったのはちょっとした偶然だった。数年前、ぼーっと人混みの中を流されるように歩いていた俺はひよこひよここと飛び跳ねるように歩く男とぶつかってしまい、ひどく申し訳ない気分でそのことを謝罪しし、その言葉に反応した男はじろりと俺を見上げて小さく悪態をついた。

たったそれだけのことだ、それなのにその瞬間の恐怖は今思い出してもパニックを起こしそうになる。

顔だち！嫌らしい目つき！どれをとっても人間によく似ていて全く見分

けがつかないほどだが、俺には分かった。分かってしまった。

……そいつは人間ではないだろうということが。

パニックに陥った俺は這うように人ごみをかき分けながら逃げ出し、その日はずっと家でぶるぶると震えていた。

だが地獄はそこで終わらなかった。

一度見分けがつくようになってしまったことで人に紛れるそいつ等が見分けられるようになってしまったのだ。見分けられるようになれば今までなぜ気付かなかったのかと思うほど奴らは人間界に出てきており、そして年々その姿を増やしている。

恐らく奴らはこの世界に存在している場所ではないどこかからの侵略者なのだと思う。今はまだ目立った行動は起こしていないが、いつ何をするかは予測がつかない。いや、こうして増え続けている現状こそがもはや行動を起こしている証明だともいえる。

奴らの姿は人間にそっくりだが、見分けるためのわかりやすい特徴がいくつもある。まず、奴らは脚が悪いのか妙な歩き方をしていることが多い。そうでない場合でも皮膚がぬるついていたたり、妙なおいがるのが特徴だ。

最初の奴にぶつかったときにも感じた、胸がムカつくような生臭いようないやな臭いがする。

すんすんと鼻をならすとやはり今もわずかに奴らのおいがる。

最初は時々鼻をかすめるぐらいだったのが今やどこにいてもまとわりついてくるような気がする。

その臭いに顔をしかめていると、斜め前にたつ女が怪訝そうな顔をしてこちらを振り返ったがじろりと見返してやると慌てたように道路の方に頭を戻す。

平和ぼけした人間め。こいつらに俺の感じている恐怖の末端でも味わわせてやりたい！

後頭部を睨みつけながらぎゅっとポケットを外側から握る。

視線を雑踏に戻せば妙な歩き方をする男が路地を曲がっていくところだった。

見失ったか。という思いはあれど、やはり視界から怪しげな人物が消えるとほっとしてしまう。

しかし視線を手前に戻すとまた肩越しにちらりとこちらを伺う女と目が合い、お決まりのようにさっと背けられた後頭部を睨んでから、ふと疑念がわき起こる。

なぜこの女はこんなに俺を見てくる？

まるで下手な監視のようだ。じろじろと無遠慮に人を見て目が合えば臆病な小動物のように顔を背ける。

目の前を流れていく車が速度を落とし、停止した。

信号が変わって人が流れ出すがそれでも俺は足を踏み出すことが出来ない。

…まさか、嘘だろう。

少し足早に歩き去って行った女はお世辞にも美人とは言えないがそれでも人間にしか見えなかった。

だが先ほどの態度はあからさまに怪しい、怪しすぎる。

これは仮説だが、奴らの間で変装の質が上がり更に人間に近づいたのだとしたら？

そして、秘密に気付いた俺を監視させているのだとすれば…。

心臓が早鐘のように打ち出し、視界は狭まり指先が冷えて呼吸が荒くなる。体が危機に対して立ち向かおうとしている証拠だ。

背後から俺を抜かしていく生き物の流れに鳥肌が立つ。

いや、俺はやれる。そうだ、やれるはずだ。

煙草でも取り出すような自然な動きでポケットに手を入れて、あるはずのポケットの底を抜けて更に奥を指で探る。

俺のズボンのポケットはわざと底を抜いている、それもすべて不測の事態で奴らに襲われたときのことを想定していたからだ。

太ももにくくり付けたナイフシースの口を止めてあるスナップを外し、大ぶりのナイフのハンドルに指をかけた。これでいつ襲われても対応出来る。

汗でぬるつく手でナイフを取り落とさないように指先をズボンの布地で

拭いた、まさにその瞬間。

どん、と背中を押す物があった。

俺は何度も頭の中でシミュレーションしたそのままの動きでナイフを引き抜き、振りかぶりながら後ろを振り返る。

ばさりと飛び散った鮮血と悲鳴が、俺の世界を変えた。